熊本市南区におけるまちづくりの展開
― ワークショップを中心に ―

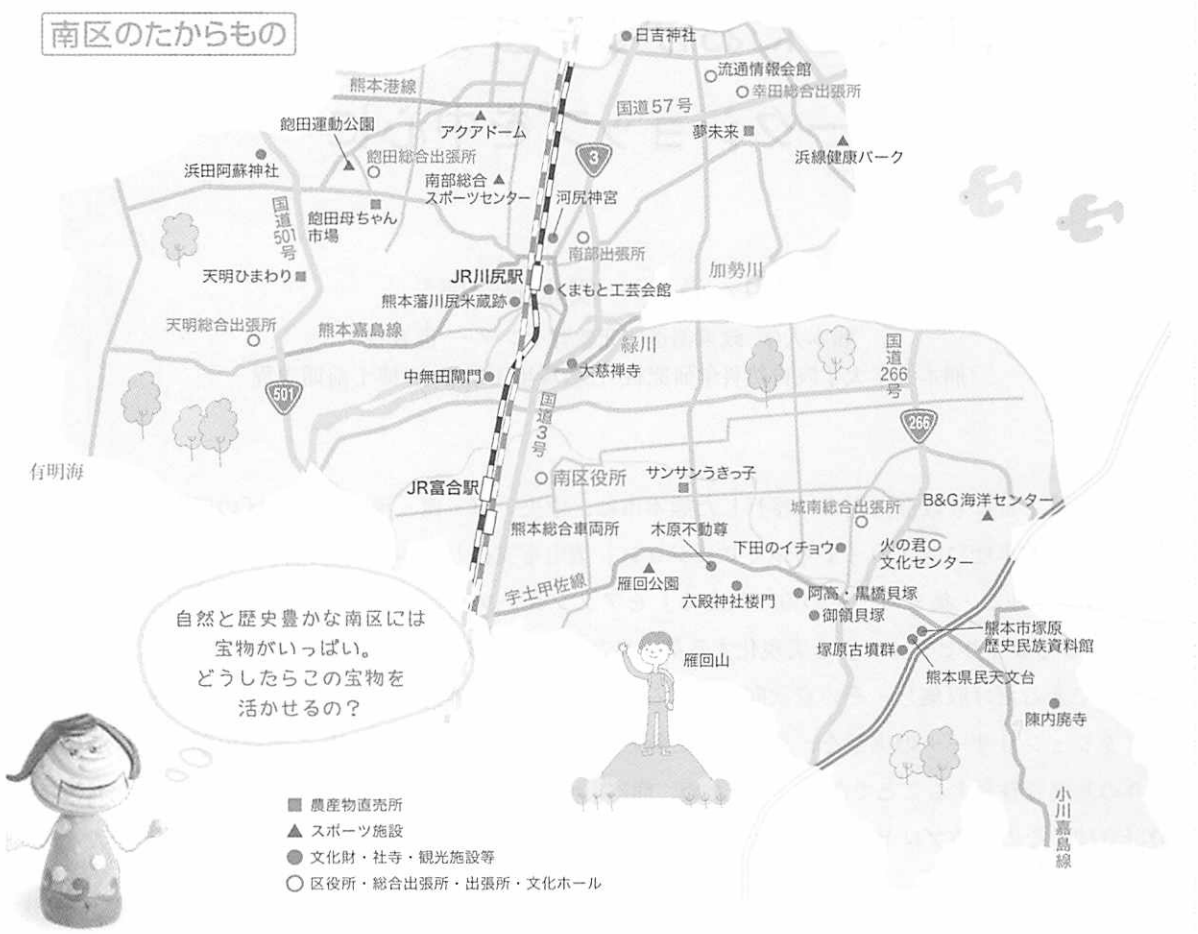
田中　尚人[1]・安永龍一郎[2]
[1]熊本大学 政策創造研究教育センター 准教授
[2]熊本大学大学院自然科学研究科 社会環境工学専攻 博士前期課程

平成24年４月１日より政令指定市に移行した熊本市は、中央・東・西・南・北の５区の区割りとなった。筆者らは、平成24年度に南区の「まちづくりビジョン」策定を支援し、本年度も南区のまちづくり事業支援を請け負った。「知る・集まる・始める・伝える」をアクションプランに掲げた南区では、本年度の要請は「集まる」、「まちづくりビジョン」を実現化する第一歩として、地域住民に集まってもらい、まちづくりに対する意見をできるだけ収集し、その意欲向上を図ることであった。本研究の目的は、筆者らのまちづくりに関するアクションリサーチの実践を、地域住民と行政との協働のもとで展開される地域の風土を活かしたまちづくりの基礎資料とすることである。そのため、熊本市南区のまちづくり事業支援における、フレームワークの設計意図、その実施プロセス、振り返りにおける地域住民と行政職員の意識形成について分析した。

１．研究の背景と目的
(1)　熊本市南区の概要

平成24年４月１日より政令指定市に移行した熊本市は、中央・東・西・南・北の５区の区割りとなった。熊本市の人口は、約73万4千人（平成22年国勢調査）で、全国の都市で17番目、面積は約390㎢で、県内人口の約40%が集中するプライメイトシティである。南区は、熊本市域の南部に位置し、人口は約73万４千人、面積は約110㎢、区域の中心部を緑川が流れ、西は有明海、南は雁回山に接する自然環境が豊かな区である。

南区には、**図－１**に示すように19小学校区に対して、それらを幸田・南部・飽田・天明・富合・城南の６地区の公民館で統括し、まちづくりを実践しようとしている。高齢化率は、21.8%で全市平均をやや上回っており、人口は微増している。６地区の特徴としては、幸田地区は、江津湖にも接し流通団地を抱えるなど都市的な土地利用が見られ、南部地区は古くから緑川舟運の主要河港として発展してきた川尻を含み、歴史と文化が豊かな地区である。飽田地区と天明地区は、ともに有明海に面し、一次産業が盛んな地区である。富合地区は、南区役所やＪＲ九州新幹線の車両基地が立地し、南区役所の中心地区と言え、城南地区は、６地区内で最大の面積を有し、まとまりを持った地区である。



図－1　南区の概要（南区まちづくりビジョン概要版より）

⑵　熊本市南区のまちづくり支援の概要

本年度も、平成24年度に引き続き、平成25年度の第２次熊本市都市マスタープランに反映される予定の「まちづくりビジョン（概ね10年後の南区の将来像を描く）」策定を中心に、南区のまちづくり事業を支援してきた。

筆者らは、豊かな歴史と自然を有する南区のまちづくりに対して、上記の基本方針が適合すると考え、以下のまちづくり支援事業を計画した。

① 年間を通じた、まちづくり事業に対するコンサルティング
② 懇話会やアンケートを通じた地域住民の意見集約
③ ワークショップの企画・運営
④ まち歩きに関するコンサルティング

⑶　まちづくり事業に対する基本方針

筆者らは、「まちづくり」とは、従来のトップダウン型の都市計画のイメージに対して、ボトムアップ型の、地域住民、行政（市町村や県、国等）、アソシエーションの各ステークホルダーが積極的に参加し協働する、法制度のみならず様々な地域資源を活用しながら進める、終わりのない地域環境改善活動と定義している。

熊本市南区のまちづくり事業支援の基本方針は、以下の通りである。

1）南区のまちづくりは、南区の地域住民と南区役所との協働のもとに実践する。

基本的な事項であるが、地域住民、行政、アソシエーション（筆者らを含む）の3つのステークホルダーの役割を確認し、適切な協働体制をつくる意識を共有した。特に、総務企画課の方々とは、常に立場や役割を確認する体制をつくった。

2）地域住民から頂いたまちづくりに関する意見は全て受け止める。

懇談会やアンケート、ワークショップなど、様々な場所で、地域住民の方々のまちづくりに対するご意見を頂くのだが、これらを「全て無駄にしない」、一度「全て受け止める」ことを基本方針に据えた。

3）南区まちづくりに、南区役所の全員が取り組む。

私たちは、「まちづくり」をまちづくりの実践を担う担当部署のみが取り組むのではなく、「南区役所の職員であれば誰もが、何らかのかたちでまちづくりに関わっているのだ」という意識を持っていただくことをお願いした。地域住民からみれば、担当であろうとなかろうと、南区役所の職員は南区役所の職員である。職員全員が、南区の将来像や「まちづくりビジョン」に対して理解を示し、南区のまちづくりに関するワークショップへの参加や、協力を依頼した。

本研究の目的は、筆者らの熊本市南区のまちづくりに関するアクションリサーチの実践を、地域住民と行政（基礎自治体）との協働のもとで展開される地域の風土を活かしたまちづくりの基礎資料とすることである。そのため、筆者らが請け負ったまちづくり事業支援における、筆者らのフレームワークの設計意図、その実施プロセス、振り返りにおける地域住民と行政職員の方々の意識形成を分析した。

⑷ 平成25年度の事業概要

・まちづくりワークショップの運営
・南区シンボルマークデザインＷＳの企画・運営
・まち歩きコースの提案（南区まち歩き手帖事業）
・まち歩きガイドの養成

2．ワークショップの運営と学び

本章では、南区のまちづくりの中心となったワークショップ（以下、ＷＳと略）に関して、その設定意図と準備内容、実施プロセス、成果と学び、について考察した。

⑴ワークショップの概要

平成25年度は、前年度にワークショップ（以下、ＷＳと略）の結果に基づいて策定された「南区まちづくりビジョン」実現のため、地域住民の方々の活動内容やその指針を策定するための意見抽出を目的としたＷＳを開催する。前年度と同様、基本的には中学校区（まちづくり交流室ごとのエリア）を単位としてワールドカフェ形式[※後述]のＷＳを開催する。地域住民と行政が協働して、地域のまちづくりの現状や課題等を共有・認識し、その課題解決に向けた改善策やアイデアを見出し、まちづくりの担い手の育成を目指す。

⑵　６地域（８中学校区）のワークショップ運営

各ＷＳは、一回２時間、以下のような日程で、計６回実施された。

研　修　８月23日（金）18：00～@アスパル富合
第１回　８月30日（金）19：00～@幸田公民館　幸田（託麻中エリア）
第２回　９月３日（火）19：00～@南部公民館
　　南部（日吉中・城南中・力合中エリア）
第３回　９月４日（水）19：00～@天明公民館　天明（天明中エリア）
第４回　９月５日（木）19：00～@アスパル富合　富合（富合中エリア）
第５回　９月６日（金）19：00～@火の君文化センター
　　城南（下益城城南中エリア）
第６回　９月７日（土）14：00～@飽田公民館　飽田（飽田中エリア）

第３回、第５回の総合ファシリテーターは、地域総研（株）佐藤和弘先生にお願いし、それ以外の４回は田中が務めた。

写真－１　富合地区でのＷＳの風景

写真－２　飽田地区でのＷＳの風景

⑶　ワールドカフェ形式のワークショップの進め方

ワールドカフェとは、参加者にくつろいだ状態で、自然な意見を抽出するＷＳ手法である。１ラウンドごとに話し合うメンバーを入れ替え、３ラウンドでほぼ半数のメンバーと話し合い、場の意見を共有することを目的とする。個別に、テーブルの代表者にまとめを発表させたりはしない。よって、ＷＳ後に抽出した意見を分析することが重要になる。

ワールドカフェ形式のＷＳでは、各テーブルに固定したファシリテーターはつけない。今回は、総合ファシリテーターを田中（または佐藤）が務め、毎回区役所４名、学生４名、計８名のファシリテーターが移動し、盛り上げたり、停滞を回避したりする役割を担った。

第１ラウンド（15分）

・各テーブルには、５名（または、６名）の参加者が座り、テーマに沿って、自由に（まるで、喫茶店や街角で井戸端会議をしているように）意見を出す。この時に、意見を出しながら、テーブルクロスに見立てた広用紙に、ペンで参加者が直接書き込みながら、声に出して同じテーブルに座っている参加者に聞こえるように発表することが大切である。聞き取りにくいな、と感じたら、ファシリテーターは復唱する。

・第１ラウンドが終了したら、一人（ホスト）を残して、他の４名は違うテーブルに移動する。この時、一度話し合った人とは同じテーブルにつかないようにする。

第２ラウンド（15分）

・第１ラウンドと同じように、意見を出すのだが、その前に１分だけ、ホスト（前回の議論を聞いていた、同じテーブルに座っている人）が前回の説明をする。
・ホストの１分間の説明の後、第１ラウンドと同じように意見を出す。
・第２ラウンドが終了したら、違う人がホストになって、テーブルを移動。
※ファシリテーターは、広用紙の状況をよく見て、書ききれなくなったら紙を換える。
１テーブル各テーマにつき広用紙は一枚が原則だが、予備も準備しておく。

第３ラウンド（15分）

・第２ラウンドと同様に、ホストの１分間の説明の後、意見を出す。

⑷　ワークショップの流れ

・１回２時間
・ワールドカフェ形式のＷＳを２セット
・スタッフは、１時間前に到着、準備。

○挨拶、説明（10分）
※「ＷＳでは相手を否定しない。議論は対案を出してから」を徹底

○ワールドカフェ１
「○○中学校区をこんな校区にしたい、やってみたいまちづくり」
（１ラウンド15分×３ラウンド＝45分）

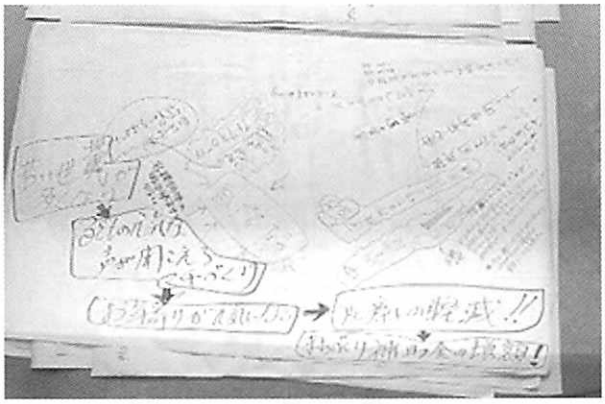
○ＷＳの説明と簡単な振り返り（10分）※時間調節

○ワールドカフェ２
「○○中学校区のまちづくりの○と×」※現状と課題をソフトに表現
（３ラウンド：45分）

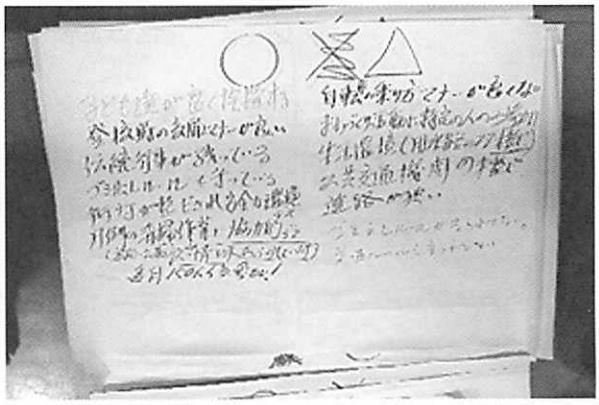
○各自で振り返り（10分）

⑸　６地区におけるワークショップの成果

本年度の６地区におけるＷＳでは、まず前半に「（各中学）校区のまちづくりの○と×（**図－２**）」、そしてそれをふまえて後半に「校区をどうしたいか、やってみたいまちづくり（**図－３**）」のワークシートが各１枚、及びワークショップの最後に書いていた



図－２　「校区をどうしたいか」



図－３　「校区のまちづくりの○と×」

だいた「振り返りシート」が人数分、各テーブルごとに得られた。

ワークシートについては各地区での参加人数に違いがあり、幸田で12テーブル24枚、南部で15テーブル30枚、天明で10テーブル20枚、富合で５テーブル10枚、城南で13テーブル26枚、飽田で８テーブル16枚の計126枚、また振り返りシートは合計で232枚得られた。

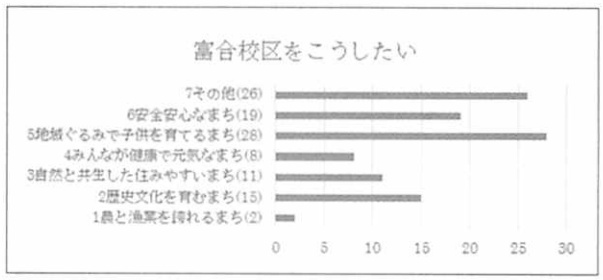
まずＷＳでの成果物であるワークシートに記載されている内容を、各テーブルごとにエクセルに抽出し、それぞれどのような話し合いが行われていたかを把握した。抽出された話題は、おおよそ各テーブル一つの項目について100～200個であった。

次に、その話題データを去年のまちづくりビジョンで策定された６つのテーマ（図－４参照）に沿ってさらに分類した（図５－７参照）。

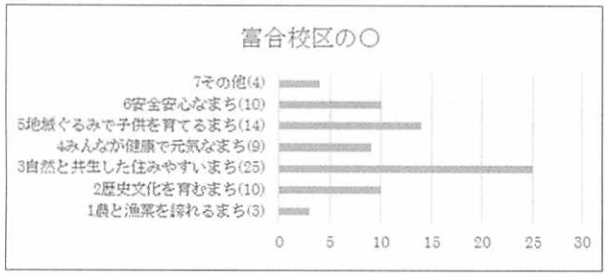
図－４　南区のまちづくりにおける６つの基本目標

７．その他、に分類した例としては、「どうしようもない」などである。分類した意見は合計しグラフ化を行った。得られたグラフの例を以下に示す。

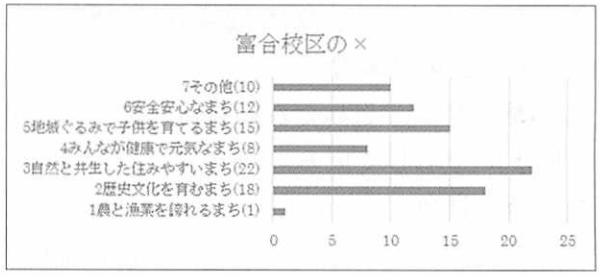
これらのデータをまとめた表－１を更に以下に示す。



図－５　富合校区をこうしたい



図－６　富合校区の○



図－７　富合校区の×

表－１　６地区におけるＷＳのまとめ

	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
場所/日時/参加者	幸田(08/30) 43人	南部(09/03) 51人	天明(09/04) 40人	富合(09/05) 17人	城南(09/06) 48人	飽田(09/07) 33人
校区の○						
意見数	77個	121個	110個	75個	204個	88個
意見/人数	1.8(個/人)	3.6(個/人)	2.8(個/人)	4.4(個/人)	4.3(個/人)	2.7(個/人)
校区の×						
意見数	88個	115個	134個	86個	200個	93個
意見/人数	2.0(個/人)	2.2(個/人)	3.4(個/人)	5.0(個/人)	4.2(個/人)	2.8(個/人)
やりたいまちづくり						
意見数	277個	314個	199個	109個	217個	114個
意見/人数	6.4(個/人)	6.1(個/人)	4.9(個/人)	6.4(個/人)	4.5(個/人)	3.4(個/人)
校区の○	1 テーマ5	1 テーマ5	1 テーマ4	1 テーマ3	1 テーマ3	1 テーマ4
テーマベスト3	2 テーマ4	2 テーマ4	2 テーマ3	2 テーマ5	2 テーマ2	2 テーマ1
	3 テーマ3	3 テーマ3	3 テーマ2	3 テーマ2・6	3 テーマ1	3 テーマ2
校区の×	1 テーマ6	1 テーマ5	1 テーマ6	1 テーマ3	1 テーマ3	1 テーマ4
テーマベスト3	2 テーマ5	2 テーマ6	2 テーマ3	2 テーマ2	2 テーマ6	2 テーマ3
	3 テーマ3	3 テーマ3	3 テーマ5	3 テーマ5	3 テーマ1	3 テーマ6
やりたい	1 テーマ3	1 テーマ5	1 テーマ5	1 テーマ5	1 テーマ1	1 テーマ4
まちづくり	2 テーマ5	2 テーマ6	2 テーマ6	2 テーマ6	2 テーマ3	2 テーマ5
テーマベスト3	3 テーマ6	3 テーマ4	3 テーマ1	3 テーマ2	3 テーマ5	3 テーマ1
校区の○	1子供のあいさつがよい(6)	1地域のイベント(6)	1人がいい(16)	1仲の良いまち(6)	1自然環境(21)	1イベントが盛ん(9)
意見ベスト3	2話合いの場がある(6)	2地域の交流(5)	2挨拶がよい(4)	2伝統のあるまち(5)	2宝がある(13)	2地域の交流(7)
	3周囲のサポートがある(5)	3子供の挨拶(4)	3協調性がある(3)	3自然のある町(4)	3道路整備(10)	3スポーツ盛ん(6)
校区の×	1インフラ整備不備(19)	1交流の場がない(8)	1マナーが悪い(12)	1インフラ整備不十分(15)	1交通の便悪い(23)	1施設がない(11)
意見ベスト3	2マナー悪い(5)	2若い人への不満(5)	2道が狭い(5)	2市民協働不可(3)	2町の活気ない(11)	2繋がりがない(5)
	3防災意識低い(1)	3あいさつが悪い(4)	3防災関係(4)	3自然の劣化(2)	3自然環境(10)	3イベント(2)
やりたいまちづくり	1道路整備(62)	1つながりがほしい(20)	1若い人が住める町(13)	1若者を増やす(9)	1施設整備物産館など(12)	1イベント開催(16)
意見ベスト3	2花を植えたい(12)	2遊ぶ場所の提供(12)	2若い人との交流(10)	2つながりがほしい(7)	2農家増やして(9)	2つながりがほしい(8)
	3ゴミをなくす(3)	3スポーツ大会の開催(5)	3若いリーダーの育成(4)	3転入者を歓迎する(6)	3ネットワークづくり(7)	3施設整備(8)

3．ワークショップの成果の分析

(1)　6地区の比較分析

表－1は、それぞれの校区において、得られた意見とその意見のテーマ別数の上位3位までを示している。

1）参加者数

参加者が、最も多かったのは南部地区（51人）、最も少なかったのは富合地区（17人）であった。

2）一人当たり意見数

全ての意見数を参加者数で割った「一人当たり意見数」が、最も多かったのは富合地区（15.8個／人）、最も少なかったのは飽田地区（8.9個／人）であった。このように、参加者数と意見数には比例関係はない。

「校区の○と×」の回に、意見数が最も多かったのは富合地区（9.4個／人）、最も少なかったのは幸田地区（3.8個／人）であった。

「やりたいまちづくり」の回に、意見数が最も多かったのは幸田地区と富合地区（6.4個／人）、最も少なかったのは飽田地区（3.4個／人）であった。

第1回、第2回の二回のＷＳでは、「やりたいまちづくり」を前半にやり、「校区の○と×」を後半に行った。

この結果、全ての地区において、前半にやったＷＳの方が、後半にやったＷＳより、意見がたくさん出ていることが分かった。

3）テーマ別の分析

「校区の○」では、テーマ５：地域ぐるみで子育て、テーマ４：健康で元気なまち、テーマ３：自然と共生、などのテーマに関する意見が多くみられた。

「校区の×」では、テーマ６：安心・安全、テーマ３：自然と共生、テーマ５：地域ぐるみで子育て、などのテーマに関する意見が多くみられた。

○にも×にも、テーマ３：自然と共生、テーマ５：地域ぐるみで子育てがベスト3にランクインしており、これらのテーマは良きにつけ悪きにつけ、地域住民の方々の興味の対象となることが分かった。

「やりたいまちづくり」では、テーマ５：地域ぐるみで子育て、テーマ６：安心・安全、が比較的多く見受けられるが、それぞれの地区でやりたい項目について個性がみられた。

4）地域別の分析

幸田地区と南部地区では、よく似たＷＳの結果を示し、全体として地域住民の方々は、「テーマ５：地域ぐるみで子育て」に関心が高いといえる。

南部地区、天明地区、富合地区では、「やりたいまちづくり」のＷＳにて、3地区とも「テーマ５：地域ぐるみで子育て」が挙げられ、意見としては「若者を呼び戻す」などのアイデアが提示されていた。城南地区では「テーマ３：自然と共生」に対して地域住民の方々の意識が高く、飽田地区では「テーマ４：健康で元気なまち」に対して地域住民の方々の意識が高かった。

⑵　総合分析

今回のワークショップでは出席者の人数の違いはあったが、結果的には、参加者数は意見数に比例はしておらず、ワールドカフェ形式のＷＳは、参加人数に意見数が影響されにくいということがわかった。

ＷＳ実施期間中は、参加者と主催者の両方から意見を収集し、次のＷＳへと反映することができた。これにより、実際に第三回目のＷＳからは、話し合いのテーマを、前半と後半の繋がりの観点から入れ替え、参加者から高評価を得ることができた。

さらにＷＳの運営にあたり、本学の学生を各テーブルのファシリテーターとして配置することができ、複数回ファシリテーションを経験することによって運営の技術を身につけることができた。

また、ファシリテーターには、南区役所の職員の方々にもなって頂いている。これは、同じＷＳ運営者として、大学と行政とのパートナーシップに基づく協働に他ならない。ＷＳを通じて、地域住民、行政、アソシエーションとして大学が介入し、「南区を知る」から各ステークホルダーが「集まる」という、次のステップに無事に移行することができた。

４．まちづくりの次のステップへ向けて

平成24年度には、南区の市民の方々の意見を集約し策定されたまちづくりビジョンの中に、アクションプラン（図－８）が描かれている。

また、これらの基本目標を、市民・行政・アソシエーションが協働して実現していくための行動指針を設定した。

① 知　る：それぞれの立場で、南区の現状や魅力を知るよう努める
② 集まる：誰かと共に活動し、組織づくりやネットワーク化を進める
③ 始める：できることから、実際に取り組み始める
④ 伝える：様々な取り組みを地域内外に広げ、将来世代につなげる

図－８　南区のまちづくりにおけるアクションプラン

この４つの行動指針は、市民・行政・アソシエーションの各主体が①から④、さらに④から再度①へと繋がるように活動するとともに、３者が連携し活動を広げていくための仕組みとなっている。

本年度は、南区のまちづくり支援に関して、主としてＷＳの運営に関わった。二年目ということで、今年はＷＳの手法を、ブレスト＋ＫＪ法という従来のものから、ワールドカフェ方式に転換し、「自分たちで」議論する仕掛けをつくった。この「自分たちで」には、地域住民のみならず行政も含めており、「市民参加」とともに「行政参加」を促す力となる。

謝辞：本研究には、様々な方々にご協力頂きました。永目工嗣区長をはじめ、熊本市南区役所の皆様、懇話会やワークショップに参加して下さった南区の市民の皆様、そしてともに運営に携わった熊本大学工学部社会環境工学科地域風土計画研究室の学生諸君には、たいへんお世話になりました。記して感謝の意を表します。

【参考文献】

1）参加するまちづくり ワークショップがわかる本、伊藤雅春・大久手計画工房、農山漁村文化協会、2003.9.
2）「まち歩き」をしかける コミュニティ・ツーリズムの手ほどき、茶谷幸治、学芸出版社、2012.8.
3）地域をかえるソフトパワー、藤浩志・ＡＡＦネットワーク著、青幻社、2012.12.
4）Social Design 社会をちょっとよくするプロジェクトのつくりかた、並河　進、木楽舎、2012.12.
5）新しい広場をつくる－市民芸術概論綱要、平田オリザ、岩波書店、2013.10.

FACILITATION OF COMMUNITY DEVELOPMENT IN MINAMI-KU, KUMAMOTO CITY FORCUSING ON WORKSHOPS

Naoto TANAKA and Ryuichiro YASUNAGA

Kumamoto city consists from five divisions from 1st April in 2012. Authers are concerned with the facilitation of community development in Minami-ku, Kumamoto city. In the community development vision of Minami-ku, action plan's catch phrase is "Know, Gather, Start and Make stories". The aim of action for community development in this year is gathering for collectiong a various information as a first step. In this paper, we analysed the data of our action research in workshops about community development in Minami-ku. We described about our framework for facititation of community development, the process of this community development and consensus building between local collectivities and inhabitants.